

## 栗を食う娘・芋頭を食う僧都

―『徒然草』第四〇段・第六〇段と連想の手法―

松 本 昭 彦\*

### 【要 旨】

「王朝物語的章段」について夙に指摘のある、類話や物語中の同様場面を「連想」することは、説話的章段でも見られる『徒然草』の手法の一つである。第四〇段では娘の栗偏食に穀断ちを連想することで「パロディ」的なおかしみをもたらすと解釈した。ここで穀断ちが連想されていれば、三木紀人氏も「第四十段を思いおこさせる」と言われる、作品中のもう一人の偏食家・第六〇段の盛親の芋頭偏食にも、その連想を導きやすくなる。しかし、こちらはパロディ的に働くのではなく、むしろ読者に盛親による偏食行為の真の価値を気付かせることになる。兼好の資質とも関連すると考えられた連想の手法は、章段の多様な読みを作る装置になっていると言つてよいだろう。

【キーワード】『徒然草』、兼好法師、偏食、穀断ち、盛親、栗、芋頭

### 【本 文】

#### 一 はじめに

小林秀雄（1）が「鈍刀を使つて彫られた名作」と言い、「徒然なる心がどんなに澤山な事を感じ、どんなに澤山なことを言はずに我慢したか」とも言う『徒然草』第四〇段は、「兼好の感想は一切述べられていないので、どのような意味を汲み取ったらよいのか、難しい段である」（2）。

因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて人あまた言ひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親許さざりけり。 「『徒然草』第四〇段」

本稿では、まず兼好の語りの手法を参考にしてこの章段の読みについて検討し、その結果をもとに、第六〇段についても考察したい。

さて、第四〇段について、これまでの解釈（意味の汲み取り方）を確認しておこう。本稿では、近世からある二つの解釈を参照したい。まず一つは、娘の親である入道が娘の縁談を断ったことについての、褒・貶の両説である。

師（松本注＝松永貞徳）説には、かくことやうなる女なりとも、

\* 三重大大学教育学部

ほしきといふ人あらば、其くせある由をいひきかせ、其上にて嫁しむべき事を、終にゆるさざりける親の心おろかなり。彼上人（松本注Ⅱ前段に出る法然上人）の、目のさめたらんほどゝいひ、うたがひながらもなどのたまへる心ばへにことなる事をそしりて、彼段の次にかけりといへり。又或説には、ことやうなる女なれば、かたちよけれども嫁をゆるさざる入道が心をほめてかけりといへり。此段を見て、のちの心づかひとせん志ある人は、両説のうちこのむ所にしたがひて用べくこそ。

〔『徒然草文段抄』〕

現代の注釈でも、

一段の中心は、多くの人に求婚された、美貌の娘を持った親が、娘の異常な偏食癖を知つて、「かかる異様の者、人に見ゆべきにあらず」と判断して、結婚を許可しなかった、その明確な判断にあると思われる。それだけ、娘の人間としての限界を見抜いていたともいわれるし、また、結婚させないことで、娘の幸福を守ったとも考えられる。

〔安良岡康作氏『徒然草全注釈』〕（3）

兼好のねらいは、単に珍談として綴ったのではなく、娘親の確固たる判断に（その褒貶はともかく）、着目していたのではないかと思う。

〔稲田利徳氏『徒然草』〕（4）

と、入道の判断を主題と考える注釈がある。

もう一つは、

源氏に、明石入道が娘のことを思ひよせたるか。〔『契沖書入』〕

『源氏物語』に見える、明石入道とその娘の物語のパロディーのような面白さを感じさせる話である。

〔木藤才藏氏・新潮日本古典集成『徒然草』〕（5）

婚姻をめぐるこの二者（松本注Ⅱ入道親娘）のドラマは、虚実とりまぜていくつか思い出される。『契沖書入』ははやくこの話につ

いて「源氏に、明石入道が娘のことを思ひよせたるか」としているのは同じような想定に立っていると思われるが、その例をはじめ、道長と彰子、清盛と徳子など、都の「入道と娘」のいくつかの史実を連想してもよからう。

〔三木紀人氏・講談社学術文庫『徒然草全訳注』〕（6）

のように、入道「親娘」の両方に注目し、「明石入道」親娘などを連想して読めるとする説である。三木氏は「他にもさまざまな読み方が可能な段のようでもある」とも言われており、本稿では、別の連想、あるいは「見立て」の可能性を、父入道の対応の読みとも関連させて考えてみたい。

## 二 連想の手法

第四〇段の読みとして、因幡国の入道親娘に対して、『源氏物語』の明石入道親娘や史実の藤原道長・彰子、平清盛・徳子親娘等を連想しての読みができるとの先行研究を紹介した。例えば、明石入道親娘を連想すると、次のような読みができるであろう。つまり両者を重ねると、「地方の入道とその娘で、娘は美人との噂で（7）多くの求婚者がある」という点では共通するが、一方は「貴種流離」の光源氏と結ばれて後となる娘を生み、他方は極端な偏食ゆえ父入道に「異様なもの」と判断されて結婚せず、と分かれる対照性である。登場人物の構図が相似するだけに、その後の対比が焦点化し、そこから皮肉や滑稽感を読み取ることもできるわけで、「パロディー」と評される所以である。

さて、第四〇段に関し『契沖書入』を参照したが、同『書入』には、類話・故事を意識しながら章段化がなされているとの指摘が他にもある。例えば、第六九段について、

亦成真僧都ト此段ハ古事ニ相似タルコト、和漢思合セテカケリ。  
とある注記である。まず第六九段は、

書写の上人は、法花読誦の功つもりて、六根浄にかなへる人なりけり。旅の飯屋に立ち入られけるに、豆の殻を焚きて豆を煮ける音の、つぶつぶと鳴るを聞き給ひければ、「うとからぬおのれらしも、恨めしく我をば煮て、辛き目を見するものかな」と言ひけり。焚かるる豆殻の、はらはらと鳴る音は、「我が心よりすることかは。焼かるるはいかばかり堪へがたけれども、力なき事なり。かくな恨み給ひそ」とぞ聞えける。

というもので、「六根浄」を得た高德の僧・性空が、宿屋で豆殻で豆を煮る音を、煮られる恨み言とその言い訳の会話と聞いたという話である。一見して、『世説新語』（や日本でも『十訓抄』等）にある曹丕と曹植のいわゆる「七步の詩」の話の類話とわかる。兼好（及び読者）は、当然原拠の話は知っていただろうから、それを連想し重ねあわせて書いているとの指摘である。読者も日本の高德の僧が曹丕・曹植の「古事」にあるのと同じような豆の会話を聞いたという点に注目したはずである。近世の注釈では、この他にも動物同士の会話などの例を挙げる。

また、「成真僧都」とあるのは第六〇段の「盛親僧都」のことと思われる、これについては後に詳しく見るが、その「芋頭」偏食に関連して、『契沖書入』は「編年通論十八云」として、南嶽明瓚禪師が芋を焼いて宰相李泌に勧めた故事を記す。他の近世注釈書にはまた別の故事も記す。

実際にどの類話・故事を兼好が連想していたかは、確認することは難しいものが多く、『書入』の指摘も少々疑問のものもある。しかしこのように、「物語や史実の中の類話・類例を連想し、両者を重ねあわせるは対比して意味を汲み取る」ということは兼好は読者にも期待していたと考えられる。そのような語り方は、『徒然草』の中に手法として用いられてい

るようである。『書入』を始め、近世の注釈では『源氏物語』『枕草子』に言及することも多く、ここで、いわゆる「王朝物語的章段」について見ておこう。

「王朝物語的章段」は、『寿命院抄』が「以上ノ二段（松本注Ⅱ百四・百五段のこと）ハ、優ニヤサシキ者也。源氏枕草子ノ面力ケ誠作物語ノ筆法ノ眼目アラハレタリ」とし、『文段抄』が「源氏物語などの筆法を移して風流を書けり」とするなど、「古注が源氏物語や枕草子の面影を見、「作物語」的な印象を既に記している」（8）。これには第三二段、四三段、四四段、一〇四段、一〇五段等が該当し、『源氏物語』等の表現や場面構成・雰囲気を利用し、物語の一場面のように登場人物の行動や情景を描いているものである。

例えば、第一〇五段と『兼好法師集』第33番歌の詞書にはよく似た場面設定・描写があり、それが『源氏物語』の表現・場面設定と深い関連があることが注目されている。

北の屋かげに消え残したる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、限なくはあらぬに、人離れなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ。かぶし・かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さとかをりたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はつればつれ聞えたるもゆかし。

冬の夜、荒れたる所の簀子にしりかけて、木だかき松の木の間より限なくもりたる月を見て、あか月まで物がたりし侍ける人に

おもひいづや軒のしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は

## 『兼好法師集』第33番歌』

神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、内裏よりまかではべるに、ある上人来あひて、この車にあひ乗りてはべれば、……この女の家はた避きぬ道なりければ、荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿る住み処を過ぎむもさすがにておりはべりぬかし。もとよりさる心をはせるにやありけむ、この男いたくすすろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけてとばかり月を見る。

## 「『源氏物語』「帚木」巻」

『源氏物語』の他の巻等を含め、細かい表現の比較は先行研究で詳細に検討されている(9)ので省略するが、兼好は自身の実体験から、平安時代の作り物語中の同様の場面を連想し、その視点・枠組みを利用して改めて見つめ直し、自らを第三者に見立てて描いている、と言えよう。読者は、その二重映しを読むことを期待されている。

このような手法に関連して、稲田利徳氏(10)は、第七一段に、

昔物語を聞きても、この比の人の家の、そこほどにてぞありけん  
と覚え、人も、今見る人の中に思ひよそへらるるは、誰もかく覚ゆる  
にや。

また、如何なる折ぞ、ただいま人の言ふ事も、目に見ゆる物も、  
わが心のうちも、かかる事のいづぞやありしかと覚えて、いつとは  
思ひ出でねども、まさしくありし心地のするは、我ばかりかく思ふ  
にや。

とあることに注目され、

こういった心理の不思議な作用を、「誰もかく覚ゆるにや」「我ばかりかく思ふにや」と重ねていぶかる。かかる経験は誰にもある心理作用だが、兼好はそれが人一倍はなはだしかったのであろうか。眼前の光景や人物の営為を見て、すぐに昔物語の同様の場面を重ね

あわせてゆく先掲の章段(松本注Ⅱ王朝物語的章段のこと)は、このような兼好の資質と脈絡をもって創造されたものではなからうか。

と指摘しておられる。兼好自身の体験から王朝物語の一場面を、また「昔物語」から現在の誰彼を、さらに自身の体験の中でも現在の出来事を過去の同様の出来事に、それぞれ連想し重ねようとする。王朝物語的章段では自身の体験から物語中の同様の一場面が連想されるのに対し、説話的章段では、第六九段のように、語られる出来事の類話・話型が連想され、重ねられる。以下、その他の章段の例を見てみる。

例えば、第一段は、前半で「栗栖野」(11)を通過してさらに奥の山里に、寂しく風流に住みなす遁世者の庵を見つけて感動した情景が描かれる。

神無月の比、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍  
りしに、遙かなる苔の細道をふみわけて、心ぼそく住みなしたる庵  
あり。木の葉に埋もるる懸樋のしづくならでは、つゆおとなふもの  
なし。閑伽棚に菊・紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人のあ  
ればなるべし。

かくてもあられけるよと、あはれに見るほどに、かなたの庭に、  
大きな柑子の木の、枝もたわわになりたるがまはりをきびしく囲  
ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと覚えしか。

前半の描写には『源氏物語』「賢木」巻の場面が二重映しにされ、「栗栖野」の歌枕的喚起力ともあいまって、読者は作り物語の一場面であるかのような雰囲気を感じる、という点で先述の「王朝物語的章段」の手法である。ところが続く後半では、蜜柑の木の周りが盗難よけに厳重に囲われているのを見てがっかりした、というオチが付く。幻滅したのであるが、兼好の「この木なからましかばと覚えしか」という感想に注目した

い。ここに、ある話型が連想されていると考える。兼好は『徒然草』中で「鴨長明が四季物語」を引用しているので、同じく長明作の『発心集』中の説話を見てみよう（12）。

近比、ある僧の家に、大きな橘の木ありけり。実の多くなるのみにあらず、其の味も心ことなりければ、主の僧また、たぐひなき物になむ思へりける。

（中略）隣りに住んでいた尼が病氣になり湯水も飲めなくなつた時、この橘の実を食べたいと望んだが、僧は「情なくかたく惜しみて、一つもおこせず」。恨んだ尼は死後、その橘の実を食い尽くす虫となる）

隣りの僧、此の事を知らずして日来すぎける程に、この橘の落ちたるをとりて喰はんとて、皮をむきて見るに、橘の袋ごと、白き虫の五六分ばかりなるあり。驚きて、「いづれもかかるなんめりや」と思ひて、見れば、そこらの橘、さながら同じやうになむありける。年を追ひてかくのみありければ、「何にかはせむ」とて、はてには其の木を切り捨ててげり。

〔『発心集』巻八・第8話「老尼、死の後、橘の虫となる事」〕横川に、尊勝の阿闍梨陽範と云ひける人、目出たき紅梅を植ゑて、またなき物にして、華ざかりには、偏に此れを興じつつ、自ら、人の折るをも、ことに惜しみ、さいなみける程に、いかと思ひけん、弟子なんどもほかへ行きて、人も無かりけるひまに、心もなき小法師の独りありけるを呼びて、「よきやある。持て来よ」と云ひて、此の梅の木を土きはより切つて、上に砂打ち散らして、跡形なくて居たり。弟子、歸りて、驚き怪しみて故を問ひければ、「唯、よしなれば」とぞ答へける。

〔『発心集』巻一・第7話後半「陽範阿闍梨、梅木を切る事」〕

いずれの話も、僧が木を大切にする余り、他の人をよせつけずその花や実を独り占めにしようとするが、その結果、一つ目の話は隣家の尼が虫に転生し橘の木は切り倒さざるを得なくなり、二つ目の話は、自らの執心の罪に気付き、切り倒すという話である。例えばこれらの話は「対象の木がない状態になる」という結末を迎える点で兼好の感想と響き合う。他にも、『発心集』には

六波羅寺の住僧幸仙と云ひける者は、年来道心深かりけるが、橘の木を愛し、いささか彼の執心によりて、くちなはと成つて、彼の下にぞ住みける。委くは伝にあり。

〔『発心集』巻一・第8話末尾「六波羅寺幸仙、橘木を愛する事」〕（13）という、よく知られた説話もある。

兼好は、単に物語的興味が損なわれ幻滅したとするだけでなく、僧が樹木に執着するという説話の話型をも連想して語っているのではないだろうか。第一一話は、王朝物語的章段に見られる連想の手法と、説話的章段の連想の手法とのハイブリッドと言えるだろう。

また第六八段は、「大根の恩返し」とも言うべき内容で、筑紫の何がしの横領使が毎日大根を二つずつ食べていたところ、敵に攻め入られた時、大根の精二人が加勢して助けてくれた、という話（14）。末尾に「深く信をいたしぬれば、かかる徳もありけるにこそ」とあるが、この表現からは、何か特定の説話に絞られるわけではないが、話型としてよくある「神仏霊験譚」が連想されており、「神仏ならもちろんだが、大根であっても深く信じればこのように……」と、重ねた上で対比する意識がうかがわれよう。『契沖書入』にも、この段について「まして仏神ヲつねに信して、其徳有ましくや」とあって、連想・対比されている。大根の助っ人でもありがたい話ではあるが、連想の中で「神仏」霊験譚の話型が比較されると、おかしみが湧く話である。

このように、王朝物語的章段に加え、説話的章段にも、類話や故事・話型が連想され、その重ね合わせにより読みが広がる手法が確認出来るだろう。

### 三 娘の偏食

前節までを参考に、改めて第四〇段を考えて見る。この章段で語られている出来事は、栗ばかり食べる娘を、その父入道は「異様のもの」と判断して多くの求婚を退けたというものだったが、話の中の「更に米のたぐひを食はざり」という表現に注目したい。「ただ栗をのみ食」うとだけ言うのではなく、この表現を付加することで、娘の偏食に別の意味が連想として呼び込まれるのではないだろうか。

今昔、比叡ノ山ニ玄常ト云フ僧有ケリ、本、京ノ人也。幼クシテ比叡ノ山ニ登テ、出家シテ師ニ随テ法門ノ道ヲ習フニ、悟リ有テ、弘ク其ノ義理ヲ知レリ。

……本山ヲ去テ幡磨ノ国、「雪彦山ニ移リ住シヌ。静ニ籠居テ、懃ニ修行ジケリ。一百果ノ栗ヲ以テ一夏九旬ヲ過シ、一百果ノ柚ヲ以テ三冬ノ食トシテゾ有ケル。」

〔『今昔物語集』巻十三・第27話「比叡山僧玄常誦法花四要品語」〕  
つまり、「栗」だけを食べ米などの穀類を食べないことは、仏道修行の「穀断ち」に類似する行為と見立てることができるわけである。

仏道修行や願を立てるため、穀物を食べないで木の実、草の根などで生活すること。

修行のために、米あるいは穀物類を食べぬこと。「或いは七日、

或いは二七日（ふたなぬか）穀を断ち漿（こむつ）を断ちて心に願ふ事を祈請するに（今昔・四・二八）」のように、所願成就のために一時的に行うこともあったが、堅固な道心のしるしとして永続的に行うこともあり、また、仙術を習得する道でもあった。

〔『角川古語大辞典』「穀断ち」〕  
仏教説話・往生伝・神仙伝類だけでなく、この穀断ちという行為は貴族日記や文書にも記述されており、どこまでが文字通りの「穀断ち」かは不明だが、そのような仏道修行は事実と考えられ、広く知られたものであった。

今昔、陽勝ト云フ人有ケリ。……堅固ノ道心発テ、本山ヲ去ナムト思フ心付ヌ。遂ニ山ヲ出テ、金峰ノ仙ノ旧室ニ至リヌ。亦、南京ノ牟田寺ニ籠リ居テ、仙ノ法ヲ習フ。始ハ穀ヲ断テ菜ヲ食フ。次ニハ亦菜ヲ断テ菓蓴ヲ食フ。後ニハ偏ニ食ヲ断ツ。但シ、日ニ粟一粒ヲ食フ、身ニハ藤ノ衣ヲ着タリ。遂ニ食ヲ離レヌ。

〔『今昔物語集』巻十三・第3話「陽勝修苦行成仙人語」〕  
昔、摂津の国の山の中に、あやしの草庵して、尼の住むありけり。五穀を断ちて、いちみ極の実おなん取り置きて、食ひ物には調じける。〔『閑居友』下・一「摂津の国の山中の尼の発心事」〕

吾れ去んじ天長九年十一月十二日より深く穀味を厭ひて専ら坐禪を好む。みな是令法久住の勝計、並びに末世後生の弟子門徒等の為なり。〔空海「御遺告」〕

高野の穀断聖人（行勝房）（15）来たる。数刻談語す。此の聖人奇異の靈驗等有りと云々。余之を問ふ。粗らこれが実を語る。仰ぎて信ずべき歟。天下直なるべきの由、去冬夢想有りと云々。件の僧去春比より祈を示し付ける者なり。余及び女房、大将の姫君等皆護身を受け了んぬ。

〔『玉葉』元暦元年（一一八四）十二月三日条〕  
娘の偏食のあり方が「穀断ち」という崇高な苦行に見立てられると、本章段の出来事に、高僧伝や往生譚の話型が重ねられる。すると、それほどに仏道に熱心な娘が、入道の好判断の結果おそらく一生不犯を通し、娘

の本意(？)は果たされることになる、という説話的読みが可能となる。ところが実際は、入道は娘を「異様のもの」と考え、それを理由として結婚は無理と判断するのである。近世以来の注釈でこの段を『源氏物語』の明石入道親娘などを連想してその「パロディ」と見る見方を挙げたが、別の読み方として、穀断ちをモチーフに持つ高僧伝・往生譚の話を連想することで、苦行を行う娘とその父「入道」という話に対するパロディと見ることもできるのではないだろうか。

#### 四 盛親僧都の偏食

第六〇段については第二節でも若干触れたが、本節ではもう少し詳しくこの段を見てみる。

さて、第六〇段の盛親僧都は、第四〇段の娘以外にもう一人『徒然草』中に描かれる偏食で大食の登場人物である。

真乗院に盛親僧都とて、やんごとなき智者ありけり。芋頭といふ物を好みて、多く食ひけり。談義の座にても、大きな鉢にうづたかく盛りて、膝もとに置きつつ、食ひながら文をも読みけり。患ふ事あるには、七日、二七日など、療治とて籠り居て、思ふやうによき芋頭をえらびて、ことに多く食ひて、万の病を癒やしけり。人に食はする事なし。ただひとりのみぞ食ひける。

きはめて貧しかりけるに、師匠、死にさまに、錢二百貫と坊ひとつをゆづりたりけるを、坊を百貫に売って、彼是三万疋を芋頭の錢とさだめて、京なる人にあづけおきて、十貫づつとりよせて、芋頭を乏しからず召しけるほどに、又、異用に用ふることなくて、その錢みなに成りにけり。「三百貫の物を貧しき身にまうけて、かくはからひける、誠に有難き道心者なり」とぞ、人申しける。(後略)

〔『徒然草』第六〇段〕

盛親僧都の詳しい伝記はわからないが、兼好とほぼ同時代の真言僧である。さて、本段の一つめのエピソードは、右に掲げたこの盛親が芋頭を嗜癖して、三百貫の錢をすべて芋頭代にして食べてしまったという話である。偏食の程度を考えるために、極めて不正確ではあるが、一日にどれくらいを食べたことになるか、試みに計算してみよう。

盛親の芋頭代は、全部で錢三百貫(三万疋)であり、『百鍊抄』寛喜二年(一二三〇)六月二十四日条に「錢一貫を以て米一石に直るべきの由、宣旨下さる」とあることからすると、米三百石に相当する。米一升が大体1.46kgで計算すると、それは4万3800kgになる。当時の米や芋の価格がわかればいいのだが、難しいので、ここから先は、現代の物価で考えることにする。稿を成している二〇二二年はロシアのウクライナ侵略に起因するエネルギー価格の高騰などで、例年に比べ少し高めと思われるが、近所のスーパーでは、里芋350gが250円(税抜き)で売られている。一方、米価はブランドによりさまざまであるが、一応、高級米でも格安品でもなく、10kgで4000円(同)としておく。米4万3800kgは1752万円に相当し、里芋が2万4528kg買えることになる。中程度の大きさのものが一個70gとして、35万4000個である。これを、師匠の死去から何年かけて食いつぶしたかだが、二十年として毎日四十八個、十五年で完食したとすると、毎日六十数個食べ続けた計算になる(16)。錢を預けておいた「京なる人」が、この時期盛んになりつつあった現代で言う金融業者であれば、利子がついたなら、さらに多くを食べられたことになる。盛真僧都は、これを人に与えず一人で食い潰した。談義の場で仏書を講ずる際も食い続けた。「よろづ自由」(17)な、「世をかくろく思ひたる曲者」の面目躍如である。

ところで、先ほどの計算は米・里芋ともに現代の価額によるもので、正確なところはあまりあてにできないだろうが、いくら盛親が「大食」とは

言え、一日の食事のかなりの部分が芋頭で占められていたことになるのはわかる。本文にあえて師匠からの遺産の具体的な金額を挙げることで、盛親ともほぼ同時代の読者には実感をもって捉えられただろう。さらに、病気の際などは何週間にもわたって芋頭をことに多く食べ込んだとされる。盛親「僧都」は「出仕して饗膳などにつく」こともあったわけだし、「米のたぐひを食は」なかったと言われているわけでもないが、これだけ芋頭に食が集中すれば、穀類を食べることのない日も多かったと考えられよう。

一方、三百貫を他の食べ物など別の用途に使わなかった無欲さは、人々に「誠に有り難き道心者なり」と評されたと語られている。『全訳注』も「特定の食物への偏愛という点では、第四十段を思いおこさせるが、これは、主人公のすさまじい嗜好が超越的な精神世界を示すものとなっている」と言われるように、この偏食は、単に「曲者」の奇行の一つとして描写されているのではなく、見方を変えれば、盛親の仏教的なあり方に関わる行為として語られていると言えよう。病気の際に「七日、二七日など、……籠り居て」と表現されているのは、仏教での所願成就の祈願の方法である（先掲『角川古語大辞典』参照）。つまり、欲望をふり落とし、心身を回復させる盛親の芋頭偏食は、それと意識しての修行とは描かれないが、結果として「穀断ち」に近い行為として語られているのではないだろうか。

章段末で兼好は、盛真を「尋常ならぬさまなれども、人に厭はれず、よろづ許されけり。徳のいたれりけるにや」と評価している。この評価について、『全訳注』は「盛親の自由境が、単なるわがままではなくして、その人格的精進の到り達した所に展開した、超常識的な個性的絶対性に貫かれていることを兼好が直感したためであつたと思われる」とし、『全訳注』も「さすがの兼好も、盛親を「まことの人」（第三十八

段）の実例と見ているのかもしれない」とする。盛親の「自由」さは、「曲者」の奇行のレベルを突き抜けて、「徳のいた」りに達する。盛親の偏食がその過程に参加していたとすれば、穀断ちに見立てることは、行為の外形的類似性にとどまらず、行為の真の意味にも触れていることになる。穀断ちの見立てにより連想される高僧伝の話型は、本章段においてはパロディではなく、型破りながら本物の「高僧」の伝記を形作るのである。

## 五 おわりに

「王朝物語的章段」について夙に指摘のある、類話や物語中の同様場面を「連想」することは、説話的章段でも見られる『徒然草』の手法の一つである。第四〇段では娘の栗偏食に穀断ちを連想することで「パロディ」的なおかしみをもたらすと解釈した。ここで穀断ちが連想されていれば、三木紀人氏も「第四十段を思いおこさせる」と言われる、作品中のもう一人の偏食家・第六〇段の盛親の芋頭偏食にも、その連想を導きやすくなる。しかし、こちらはパロディ的に働くのではなく、むしろ読者に偏食行為の盛親にとつての真の価値を気付かせることになる。兼好の資質とも関連すると考えられた連想の手法は、章段の多様な読みを作る装置になっていると言つてよいだろう。

## 【注】

(1) 小林秀雄「徒然草」（『小林秀雄全集』第七巻「歴史と文学・無常」といふ事」・新潮社・2001年10月。初出は「文学界」昭和17年8月）

(2) 久保田淳氏「徒然草評釈・九十八」（『国文学 解釈と教材の研究』



1987年10月)

(3) 角川書店・1967年2月

(4) 貴重本刊行会・2001年7月

(5) 新潮社・1977年3月

(6) 講談社・1979年9月

(7) 明石上については、『源氏物語』「若紫」巻で、光源氏の家司・良清が、「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり」と語る。

(8) 伊藤伸江氏「『徒然草』第四段の筆法―王朝的章段の描きたかつたもの」(『国語と国文学』2001年8月)。王朝物語的章段については、他に稲田利徳氏「『徒然草』の虚構性」(『徒然草論』(笠間書院・2008年11月)所収。初出は、『国語と国文学』第五十三巻第六号・昭和51年6月)、藤崎祐二氏「『徒然草』第百五段考…典拠と虚構性について」(『語文研究』第108・109号||2010年6月)等、様々な観点からの考察がある。

(9) 前掲、伊藤氏・藤崎氏論文等。

(10) (8)に挙げた稲田氏論文と同じ。

(11) 小川剛生氏『徒然草をよみなおす』(筑摩書房・2020年10月)参照。

(12) 『発心集』の成立には諸説あるが、ここでは巻八まで含めて兼好は読んだと考えておく。

(13) 『今昔物語集』巻十三・第42話「六波羅僧講仙、聞説法花得益語」に詳しい同話がある。他に『大日本国法華験記』上・37、『拾遺往生伝』中・2などにも。

(14) 本文は以下の通りである。

筑紫に、なにがしの押領使などいふやうなるもののありけるが、土大根を万にいみじき薬とて、朝ごとに二つつ焼きて食ひける事、

年久しくなりぬ。ある時、館の内に人もなかりける隙をはかりて、敵襲ひ来りて囲み攻めけるに、館の内に兵二人出で来て、命を惜しまず戦ひて、皆追ひ返してげり。いと不思議に覚えて、「日比ここにものし給ふとも見ぬ人々の、かく戦ひし給ふは、いかなる人ぞ」と問ひければ、「年来頼みて、朝な朝な召しする土大根らにさぶらふ」といひて失せにけり。

深く信を致しぬれば、かかる徳もありけるにこそ。

(15) 行勝については、半世紀後の延応元年(一二三九)「太政官牒」に引く嘉禎四年(一二三八)の高野山奏状でも、次のように記されている。

(前略) 故行勝上人、方丈の草庵を当山に結び、護摩火壇を此の砌に立つ。五穀の滋味を断ちて六十箇年、三時の護摩を修して二万余日、練行の倫少く、薰修年久し。故に貴賤帰依を成し、縑素随喜を致す。〔『鎌倉遺文』第5389号(「高野山寂靜院文書」)〕

(16) 因みに、小川剛生氏『兼好法師』(中央公論社・2017年11月)にご指摘のある『葛川明王院文書』「近江伊香立忌日田修理覚書」(正和二年(一二三三)三月二十三日・『鎌倉遺文』第24834号)によると、土木の人夫の手間賃とするため、二百文で米三斗が買われている。人夫用の安い米だったとすると実際より銭の価値が高く出てしまうが、こちらで計算すると、三百貫で買えるのは現在の価格で里芋53万个以上になり、二十年毎日七十個以上、十五年なら毎日九十個以上食べられることになる。

(17) 中世における「自由」は、「否定的側面を有する」(久保田淳氏「徒然草評釈・百二十六」(『国文学 解釈と教材の研究』1990年3月))。

尚、使用した本文はそれぞれ、『徒然草』『源氏物語』『今昔物語集』

は新編日本古典文学全集（小学館）、『兼好法師集』『閑居友』は新日本古典文学大系（岩波書店）、『発心集』は新潮日本古典集成（新潮社）、『契沖書入』は『契沖全集』第一六卷（岩波書店）、『徒然草文段抄』は『訂正増補 徒然草文段抄』（青山堂）（国立国会図書館デジタルコレクション・<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/888795>）、「御遺告」は『弘法大師空海全集』第八卷（筑摩書房）、『玉葉』は国書刊行会、『百鍊抄』は新訂増補国史大系（吉川弘文館）、『鎌倉遺文』は東京堂出版の本文によった。また、一部句読点・段落分けを私に改めた所があり、漢文は私に読み下した。